

# *Holes* と *Whirligig* を読む： 「味わって読むコース」教育実践レポート

## *Reading Holes and Whirligig: using literature for language education*

石 原 敏 子  
ISHIHARA Toshi

This paper will review the freshman reading course I was in charge of at Kansai University in 2004. By reflecting on and evaluating the procedures, I try to find ways to improve the course and enrich language education through literature.

### キーワード

文学作品 言語教育 リスpons・ジャーナル

literature language education literature response journal  
Louis Sachar, *Holes* Paul Fleischman, *Whirligig*

2004年度、法学部、文学部、そして経済学部で、「英語Ⅱ a, b」のクラスを担当しました。「英語Ⅱ」は、「味わって読むコース」、「うまく読むコース」、「楽しく読むコース」、「クリックして読むコース」に分かれており、それぞれ、文学作品などを題材として、テキストを丁寧に読み、内容を味わう姿勢を培うこと、reading strategiesを習得し、内容にあわせた読み方ができるようになること、制限された語彙で書かれた英文を自分の関心・レベルに合わせて読むことで、自主的な読書の姿勢を養うこと、インターネットなどでの情報を的確に読み取る方法を身につけることなど、を目標にしています。事前に学生の希望を聞き、できるだけ希望に沿うようにクラス配置が行われています。

それまで4年間「楽しく読むコース」を担当し、多読することで英語の文に慣れ、文法・語彙を自然に身につける、また、自分でテキストを選択することで自主的な読書姿勢を養うなど、大きな効果を挙げていました。しかしながら、クラスで学生たちが利用する約200冊の本に私自身習熟することができない点、それ故、学生たちが読む本の内容・レベルに関して責

任ある助言が出来ず、また用意されたテキストの中には、私が要求するさまざまな基準に合わないものも少なからずあること、さらに、共通の内容について深い議論が出来ないという点などに不満を抱くようになり、クラス運営について反省が必要と考えるにいたりしました。

その結果、この4年間の多読コースでの経験・反省をもとに、クラス全員で同一テキストを読み、共に理解を深める方法を取りたく、「味わって読むコース」担当に変わりました。

## 1 なぜ文学作品なのか？

一回生の学生諸君の多くについて言えることですが、論説文や批評文の論者の視点や意見を正確に把握することには長けているものの、読んだものに対して自分の意見を構築するという機会をそれまであまり与えられていなかったのでしょうか、自分の意見を信じる力や他人の意見を尊重する力がまだ十分には養われていないようです。

また、英文をミクロ的に理解する力は備えているものの、それをマクロ的に拡大していく応用力を欠いています。将来、広大な情報の海から自ら進んで英文で情報を得ようとする姿勢を身につけてもらうには、学生時代に出来るだけ多くの英文に触れ、またそれが理解できるという自信を養っておく必要があるでしょう。

そのため、ストーリーの展開の面白さで読者を引き付ける文学作品は、マクロ的に読むという力を伸ばす上ではもちろんのこと、さらに、作品においては登場人物のさまざまな視点が描き出されていることから、読者はそれぞれの人物の立場を読み取り、それについて自分の意見を構築するという機会を得るという点において、格好の題材であると考えられます。作品の登場人物の描写を読むことにおいて、また、私たちがクラスでそのストーリーについて語り合う場において、人と人との交わりのなかでそれぞれの考え方や関心からさまざまな葛藤があることを知ること、そして他の人の意見や気持ちを尊重する心を養うことを可能にしてくれます。このように異なる視点が出会うなかで、相手を知り自分を知ることこそ、外国語を学ぶ一番の目的と考えています。

## 2 クラス運営の仕方

一学期に一冊の洋書を読みました。それぞれのテキストを学期内で読み終えるように計画し、毎週15～20ページのクラス外でのリーディングを課しました。そして、そのリーディング課題について、それぞれが感じたこと・考えたことをリスpons・ジャーナルに書かせ、毎回提出を求め、各自にコメントを書き、返却しました。さらに、授業時に行う他の課題と共にこのジャーナルを各自のファイルに保存させることで、学びの経過を意識させました。(リスpons・ジャーナルの内容については、後に説明します。) 授業時は、個人で、また、グループ

で課題を行い、内容の理解・確認にとどまらず、各人の意見が反映されるような問題について考えました。テストは、学期に2度行い、内容の正確な理解を確認する問題と、個人の意見を書かせる問題、そしてグループでの仕事を再認識させるような問いを出しました。

評価は、リスpons・ジャーナル（30%）、2回のテスト（30%）、発表および課題など（40%）としました。

### 3 教材と課題：具体的に

#### 3・1 春学期

##### 3・1・1 教材

春学期は、ヤング・アダルト用に書かれた作品、Louis Sacharの*Holes*を使用しました。この小説のストーリーは、主人公のひいひいおじいさんが故国ラトヴィアで占い師に助けをもらいながら約束を守らなかった事が原因で、自分の子孫に呪いがかけられ、その呪いが四世代後の主人公の行為によりようやくとける、というものです。一世紀を超える三家族および一組のカップルの歴史が、過去・現在を行き来しながら、一見、脈絡なく語りつがれていきます。彼らに起こった出来事の複雑な関係が、「ジグソー・パズル」（ニューヨーク・タイムズの書評）のピースがはまるように判明してくる終盤は、まさにこの小説の大団円です。

用いられている英語はそれほど難しくはありませんが、230ページの作品で、長文を読むことに慣れていない学生にはかなりの努力を要するものです。しかし、複雑に絡み合うストーリーの謎解き要素によって、先へ先へと読み進めたいくなるように書かれているので、毎週の課題の量を超え、自主的に読み進める学生たちも各クラスに何名かいました。

##### 3・1・2 リスpons・ジャーナル

リスpons・ジャーナルは、三部構成になっています。第1部では、その回に読んだテキストについて、その内容をまとめるのではなく、むしろ、自分が感じたこと・考えたことを書いてもらいました。学生諸君には、最初は何を求められているのかわからず、戸惑いもあったようです。しかし、数回提出を続けるうちに、また、自分のレポートにつけられたコメントから、テキストについての率直な反応が大切にされているということが明らかになり、4回目ぐらいからは確信を持って書くようになりました。そして、それぞれのスタイルのリスpons・ジャーナルがうまれてきました。主人公の行動を判断したり、自分の周りの出来事に結びつけて考えたり、また本文中のさまざまなポイント、例えば、描き出される土地の地理や、部屋の内装、また、アメリカの裁判制度に注目したり、という具合です。こうした一人一人の観察につけられたコメントを見て、学生は、読者の関心のありどころはそれぞれに異なり、多様であり、その点こそが大切にされているということを実感していきます。

第2部は、文章表現や語彙という言語的側面について十分な意識を持って読んでもらうために、その回のリーディング・テキストから重要と思われる単語・句を二つ選び、どういう点で重要と思うのかを書かせました。学生によって、登場人物の性格を表す単語であったり、全体の内容をまとめる一語であったり、初めて出会うテクニカル・タームであったりします。単語に対する意識と同時に、自分で選ぶということで自主性を高めることをめざす設問になっています。

第3部は、“Hi! to Toshi”というコーナーです。ここでは、勉強のことを離れて何を書いてもいいことにしてあります。文学作品を読み、人とかかわりを大切にしながら、一人一人の声を聴き、それぞれの読みを丁寧に延ばしていくのが本来のありかたですが、約50名の学生を相手にしてのクラスでは、到底、力が及びません。そこで、少しでも学生の声が聴けたら、という思いで設けているコーナーです。宿題の多さを批判され、授業の方法に関して反省を迫られたり、いろいろと考えさせられたり、学ぶことがたくさんあります。また、ほんの少しではありますが、学生たちの日常生活の断片が見える小さな窓の役割も果たしています。実は、このコーナーは、長時間かかるコメント書きのなかで味わうことのできる貴重な息抜きで、疲れた私を鼓舞してくれました。

### 3・1・3 クラスでの課題

*Holes* は、いくつものプロットが時間・空間を超えて複雑にからみあうストーリーなので、脈絡なく語りつがれる多くの事柄を、読者は忍耐強く読みつないでいく必要があります。そして、後に謎解きの鍵となる情報をおさえていく必要があります。あまりあからさまにならないように、それでいて重要な情報に気づかせておくような課題を作りました。

課題が同じ種類のものにならないよう、毎回、工夫しました。要約、語彙、予想などといった課題に加え、文法事項の復習や、本文に扱われているナースリー・ライムなどの知識についての問い、およびそこからの発展、手紙や料理のレシピ書き、さらに、自主性を重んじるストーリーや詩の創作、また、絵を描いたりするタスクなどを与えました。課題にバラエティを持たせているのは、学生を退屈させないためと、自分の得意分野を見つけてもらおうという趣旨からです。なかには、リスpons・ジャーナルを含め、課題の多くも、イラストで答える学生も現れました。彼女たちの個性が生かされた、素晴らしい表現方法だったと思います。

以上のような課題を個人あるいはグループで行い、成果を共有するようにしました。また、この小説は映画化されているので、ビデオを用い、その週に読んだところに該当するところを観て自分の読みを確認させ、また映像と本との違いを見つけ、それぞれの効果について話合ったりもしました。

### 3・1・4 発表

作品を読んだときの反応は各人で異なるということ、そして個々人の反応の仕方が大切にされるものであることをさらに認識してもらうために、グループ単位でそれぞれプロジェクトを考えさせ、春学期の最後の週に発表する機会を与えました。発表前3週目ぐらいから、クラスの時間の一部（15分程度）を発表準備にあてました。

プロジェクトは、*Holes* から発展することなら何でもよいということにしました。実際に行われた発表は、たとえば、作品の一場面を英語または日本語で演じる、指人形や紙人形で演じる、絵を用いて内容の理解を深める、現在人気のあるトーク・ショー風に演じる、映画について調べる、映画のシーンを読み解く、映画の広告ポスターを描く、作品中に書かれている穴の大きさを実感するため新聞紙で穴を作る、穴の掘り方を考え時間を計算する、作品中に言及される不思議な飲み物を実際に作る、また、作品中の登場人物には不可思議なニック・ネームが付けられていることから呼び名について考える、などです。なかには、アメリカ社会のありようや、文化の側面の理解へとつながる発表もあり、学生の洞察力の鋭さと想像力の豊かさを再認識させられる機会となりました。また、こうした豊かな感受性や創造力をより一層引き出す方法を考え出していく責任を実感しました。

## 3・2 秋学期

### 3・2・1 教材

秋学期は、Paul Fleischman の *Whirligig* を使用しました。この作品を選んだ理由はいくつかあります。秋学期に読んでみたい本について、それぞれのクラスの数名の学生に前もって尋ねたところ、*Holes* はストーリーの展開はおもしろかったが、ミドル・スクールに通う少年を主人公とする話であるため内容に深みが欠ける、あるいは、こどもが主人公でないものを読みたい、という意見などが聴かれました。こういう意見は、毎年どのクラスにおいても聞こえるものです。たしかに、自分と年齢の近い人物が主人公であるストーリーの場合、内容的に同化しやすいところがあります。そのため、秋学期は、ヤングアダルト作品の中から、学生たちができるだけ年齢の近いものとして、高校生を主人公とするものを選ぶことにしました。また、文の難易度についてもより挑戦的で、テーマに関しても読者にいろいろなことを考えるきっかけを与えるものとして、*Whirligig* に決定しました。

この小説は、自分の運転する車の暴走が原因で、別の車に乗っていた同年代の少女を事故死させてしまう17歳の少年、Brentが、その罪の贖いを通して成長していく様子を描く作品です。彼は罪の償いとして、少女の母親から、彼女が生きていたら周りの人々にもたらしたであろうよこびをアメリカ中に広げること、を求められます。そのために、アメリカの四隅（ワシントン州、カリフォルニア州、フロリダ州、メイン州）に、彼女の顔を模した風車を作るという仕事が課せられます。

秋学期前半は、無作為に学生を5～6人のグループに分け、各グループで、要約・ストーリー分析・質問作り・語彙強化などといった課題の中から、各自が週ごとに異なるものを担当し、その結果をグループで共有し、皆で理解を高め、成果をグループ・ファイルに保存する、という方法を取りました。しかし、最初の数週間、まだ内容の理解に十分自信が持てない段階で、個人の力で課題をこなすということには無理があったようです。成果のファイルという形で、グループで一つの作品を作り上げるという点を強調していきかけたのですが、思い通りの成果を出しつつあるグループもある一方で、ストーリーがよく理解できないという声や、また、グループでの仕事を苦手とする学生の不満も聴かれるようになりました。その結果、このグループ・ワークの方法は学期の前半だけにとどめることとし、後半はクラス全体に一括説明をする方法をとることにしました。

ここで、小説のどのような点が学生にとって難しかったのかを考えておきます。

まず、冒頭から少女の事故死という読者の心に重くのしかかるような事件が描かれ、読み進める気分にならないという本質的な問題がありました。学生は気分が重かったでしょうが、主人公の変化を追っていけば必ずよいストーリー経験ができるから、と鼓舞し続けました。また、語彙の問題もありました。春学期の作品と比較して、内容が深化し、登場人物の心理も複雑になっていますから、用いられる語彙の種類も異なり、難易度も上がっています。学生は頻繁に辞書を用いる必要があったようです。さらに、主人公が広大なアメリカ大陸を横断・縦断しながら進める旅で、アメリカの様々な地域やその土地の文化が描き出されています。こうした文化的情報が欠如しているためにテキストが理解しづらい、という事態に学生は陥ることもありました。

また、ストーリーの技法のレベルが上がっているという点から生じる問題もありました。すなわち、意味を深めるためストーリーにはさまざまな工夫がこらされているのです。特に、その構造は複雑をきわめています。このストーリーは、九章からなっていますが、まず、奇数章で、ブレントの四州を巡る旅（事件の発端、ワシントン州、カリフォルニア州、フロリダ州、メイン州での風車作り）が時間を追って描かれます。そして、その時間軸に交わるように、偶数章では、それぞれの州で、彼の作った風車がのちに人々にどのような影響を与えたかが書かれています。偶数章の配列は、ブレントのたどった旅の順序とは異なっています。ある程度ストーリーを読み進み、こうした構造が見えてくるまでは、読者は暗中模索の状態です。先行きが見えない内容である上に、読みについても不安なままストーリーを読み進めるには、強い忍耐力が必要です。多くの学生が英語で書かれた小説の読者としてはまだ初心者に近い状態にあるという状況で、要求が大きすぎたかもしれません。読み始めた段階で、構造については説明をしましたが、頭での理解と、実際に読みの中でそれが納得できるということとは別の次元のことです。多くの学生にとっては、ストーリーの構造が大きな困難として立ちだかったようです。

学生の読みを助けるために、秋学期後半のタスクは、難しい表現の説明にとどまらず、地理や歴史、ライフスタイルなど、アメリカ文化の様々な側面における知識を補うべく、そういう箇所注目させるような問題を用意しました。たとえば、ブレントが交通手段として用いるバスに関わる情報や、各地で催される独立記念日の花火大会の様子、裁判における陪審員制度、移民グループ間の軋轢、などに触れました。また、主人公と年齢が近いこともあり、ブレントが周りの人々とのつながりのなかで助けられ支えられながら自分を見つけ出していく様子に共感を抱く学生もいるようでしたので、学生たち自身の生活に結びつけて考えさせる発展問題にも取り組みました。

ショッキングな事故から始まり、暗いストーリーの展開にとまどっていた学生たちも、ストーリーの構造を理解し、主人公が自分の非を認め、周りに支えられながら立ち直っていく姿が見え始めると、読み進めることが少しは楽になったようです。この小説が描くのは、周りの人々に支えられての少年の立ち直りだけではありません。アメリカの社会を構成する様々な人種グループの抱える問題や、第二次世界大戦、およびそれ以降のユダヤ人の悲しみなどを扱い、読者の理性・想像力に訴えかけます。こうした重要な意味を持つ作品を英語で読んだということは、学生には大きな自信になったことと思います。

テキストを選択する際、学生の反応がどのようなものになるのか、多少不安もありましたが、よいストーリーを共有したいという気持ちで選びました。しかし、やはり、毎週、難しいテキストと格闘している学生を目にするのは、忍びないことでした。私の説明がいたらないところもあり、このテキストとの関わりにおいて大きな満足を得られるような助けを学生諸君に十分に提供できなかった点は、反省しなければなりません。しかし、こうした重い内容であったにもかかわらず、春学期の作品より秋学期の作品の方が読み応えがあり良かったという反応があることも学生のアンケートから知り、この教材の選択は間違いではなかった、と確信することができました。

内容、および、語彙において大いに挑戦的であるこの作品を、忍耐力をもって読了してくれたこと、学生の一人一人に心から感謝しています。

### 3・2・2 合同クラス

このコースの目的、すなわち、ストーリーの内容を味わって読むということ、を学生により明確に理解してもらうために、同時に「楽しく読むコース」を担当されている関西大学外国語教育研究機構教授、カイト・由利子先生のクラスとの合同クラスを、秋学期に3回開催しました。カイト先生のクラスでは、用意された *graded readers* の中から学生が自由に作品を選び多読することで英語に慣れる、ということが目的とされています。別のクラスの受講生と話し合うことで、異なる読みの仕方があること、そして、それぞれの読み方の特性に気づくことを目標としました。

一回は、それぞれのクラスでの読みについて話し合い、読み方の違いを意識化させるという課題の他に、*Whirligig*の一章を用い、カイト先生のクラスは一篇の短編小説として、私のクラスは全体の小説のなかの一章として読んでもらいました。学生は、それぞれの読みを共有し、話し合い、補い合うことになりました。

あと二回は、カイト先生のクラスの学生は、*graded readers*の中から、Mary Shellyの*Frankenstein*を、私のクラスの学生は、Fredric Brownの“The Weapon”という短編小説を読み、科学の発展と人間の幸福という問題について討論しました。異なる作品を併せて読むことで、単独クラスでは味わうことのできない読みの深化を経験する良い機会となりました。学生には、珍しい授業形態であり、また友達が増えたということもあり、なかなか好評でした。カイト先生も私もよい企画であったと評価し、さらに改良を加えて来年度にも同様の企画を考えています。

## 4 反省点・改良すべき点

### 4.1 クラスで用いるテキストについて

クラス全員で共通した内容について話し合える機会が持てるようにと、「楽しく読むコース」から「味わって読むコース」にかわりましたが、学生50名に統一的に1つのテキストを用いるということには、疑問が残ります。学生たちの理解力や興味には大きな幅があるので、テキストの難易度やジャンルにも少しは選択肢があってもよいのではないかと考えます。2003年度に担当した「英語Ⅲ(小説)」のクラスで、春学期は統一テキストを用いましたが、秋学期は5～7種類のテキストから自分の関心にそって選択する自由を与えました。限られた数の中からはありますが、自分の意志で決定したテキストには責任を持って積極的に関わる傾向が見られました。また、同じテキストを読む学生のあいだには仲間意識が、そして、他のテキストを選んでいるグループに対しては、良い意味での競争意識が生まれるという利点がありました。しかし、その反面、私は多数のテキストを同時に並行して読んでいなければならない、それは可能ではあったのですが、グループ毎に対応してクラスを巡回することになるので、全体については十分な配慮ができないという欠点もありました。学習の効果を考えるならば、受講者数を少しでも減らすことができればいいのですが、50名のクラスであれば、選択肢を与えるにしても、2冊、多くても3冊が限度ではないかと考えます。

### 4.2 リスpons・ジャーナル

上記のように、リスpons・ジャーナル(法学部:55名、文学部:47名、経済学部:44名)は、毎週回収し、それぞれにコメントをつけ返却しました。そのおかげで、学生の個々の取り組みや個性を尊重する機会が少しでも確保できていた点を大いに評価することができるでしょ

う。時間をかけただけの成果がうみだされることを実感する取り組みでありました。

しかし、これは、大変な作業でした。学生個々の意見に真摯に対応するには、膨大なエネルギーが必要でした。コメントを書く作業だけで、各クラス、平均的に1.5～2時間を確保する必要があり、これらのリーディングのクラスだけではなく、別に担当している「英語」の3クラスについても、これに類したジャーナルの提出を求めていたため、合計6クラスのためにコメントを書きました。週末のほとんどを、合計270枚を越える枚数のペーパーの点検作業に費やした一年でした。

時間や労力以外に、本質的な問題も残りました。すなわち、紙面上にコメントを与えるだけでは、内容的に対応しきれないという点です。秋学期の本のように考える内容が深くなればなるほど、限られた時間内で、そして、書き言葉では伝えきれないことが多いのです。また、学生から発信されたものに対する私個人の反応だけで、そこには一対一の、そして多くの場合には、一回限りの対話しか成り立たず、連続性が確保できないことが、この方法の限界でした。

2005年度は、宿題のジャーナルをクラスのグループ・ワークの中に効果的に取り入れようと計画しています。その際に、50人の学生のディスカッションを一人で聴いて回ることには、限界があります。またクラス内で用いる課題を全部手作りしていますが、ひとりで考案しているので一面的なものになってしまっています。そこで、クラス・ディスカッション、グループ・ワーク、課題の考案などに別の視点を導入することで、授業をより充実させていくことができると考え、全学共通教育機構が提供する「TAを活用した授業」に応募し、2005年度春学期には、TAを確保することができました。TAの貴重な意見と行動力に支えられ、目下授業が進行している最中です。文学作品を用いたクラスで、学生にとってより効果的な授業方法が見つかるよう試行錯誤が続いています。その成果については、後日報告したいと考えています。

#### 使用テキスト

Sachar, Louis. *Holes*. New York: Dell Laurel-Leaf, 1998.

Fleischman, Paul. *Whirligig*. New York: Dell Laurel-Leaf, 1998.